

2013年7月16日

第179回日本経営倫理学会・理念哲学研究部会議事録

部会長・宇佐神

日時：2013年7月16日（火） 18:00-20:00

場所：学士会館305号室

出席：佐藤、山本、田中、緒賀、西川、新川、長塚、遠藤、宇佐神

欠席連絡：竹内、望月、西藤、古山

1. 8月以降の例会日程：

- ① 8月5日（月）17:00-19:00 学士会館308号室
- ② 9月2日（月）暑気払い、サイゼリア神保町店、午後5時より
- ③ 10月7日（月）17:00-19:00、 学士会館308号室
- ④ 11月4日（月・祝）17:00-19:00 学士会館308号室
- ⑤ 12月2日（月）17:00-19:00
- ⑥ 1月6日（月）新年会（夕食会）17:00-19:00

今後の会場として田中敬幸氏に高教授と中野教授を通して、麗澤大学の新宿のサテライトの利用の可能性を打診してもらうことを依頼した（山本氏の推挙による）。

2. 本日初めて参加された方の自己紹介

- 1) 田中敬幸氏：2012年に麗澤大学で高先生のもとで「統合社会契約論」で博士号を取得、
現在、麗澤大学で非常勤講師。大学の公募に対応している。E-Mail：a07008t@reitaku.jp
- 2) 緒賀正浩氏：明星大学・人文学研究科教育学専攻博士後期課程（日本教育史）、明星大学で、「戦後教育改革」のテーマで博士論文を準備中。非常勤講師。 E-Mail：ogaoga84@yahoo.co.jp

3. 議事：

- 1) 前回の決定事項の確認：「**経営倫理の今日的課題**」について： **理念哲学部会の提言に向けて**
決定事項：西藤、古山、宇佐神は上記テーマに関しA410枚程度以内に各自まとめて、8月末までに宇佐神までメールに添付して送付すること。
9月の暑気払いの際、部会内で共有するため、資料として配布する予定。
- 2) CFP方式での下記論文募集へ積極的に対応されたい。
2013年6月21日付「CFP（Call for Paper）方式での論文募集について」
新川氏に交流研究会での発表をもとに纏め、対応することを要請した。
- 3) 会員よりの推薦図書等に関する報告の予定について
次回以降、会員による、推薦したい図書等の（紹介を含む）報告を入れることとする。
また、山本氏の発言を受けて、「日本をどう見るか」をめぐり問題提起と検討の機会を設定する。
* 山本氏：姜 尚中『**マックス・ウェーバーと近代**』（岩波現代文庫）（2003/1/16）
『**世界を変えた経済学の名著**』（日経ビジネス人文庫）日本経済新聞社（2013/5/2）**¥ 840 文庫**
* 宇佐神：ウェーバー『**職業としての政治**』（DER BERUF ZUR POLITIK）：経営者の倫理の嚆矢。
石角莞爾『**ユダヤの「生き延びる智慧」に学べ**』（2013/4/19）：リベラルアーツ
とダイヴァーシティの問題
* 望月氏：大原孫三郎に関する研究報告を次回にお願いできないか打診のこと。

*佐藤氏：新聞記事等をもとに、経営倫理関連の問題の提起。

このようにして、会員が相互に問題を共有することを目指す。

3. 本日の研究：

1) 宇佐神：研究発表大会での「21世紀における経営と倫理」のスライド資料配布。

2) 田坂『Invisible Capitalism 目に見えない資本主義』のまとめ、配布資料①目次

佐藤氏の問題提起：本書は大変貴重、田坂さんの座談会の記事もレポート：「良い会社とは何か」4頁もの（配布資料②）。配布資料③「経済観測：東大法学部を創造的破壊せよ＝経営共創基盤 CEO・富山和彦」〔毎日新聞 2013年06月21日東京朝刊〕を通して問題提起。

同書 25-26 頁で提起された「資本主義経済に起こる 5つのパラダイムシフト」をいのちの視点から展開し把握する必要性を宇佐神が提示。関口存男の「いのちとは生の全複合 (Total=complex des Lebens)」と金子武蔵の「思想とは自己の意識野にある全体を全面的に調整したもの」という二つのホリスティックな思考に導かれてきたとし、田坂氏がこの尺度から見たとき、重要な問題をこのパラダイムシフトにおいて 21 世紀の人類の在り方に示唆しているとした。

小説『東京大学』を紹介。東京大学の敷地や予算も検討する。

五つのパラダイム転換について：佐藤氏がコメントし、宇佐神がいのちの概念を紹介しつつ、コメントし、本書の総括とした。そのパラダイム転換は「操作主義経済」から「複雑系経済」へ；「知識経済」から「共感経済」へ；「貨幣経済」から「自発経済」へ；「享受型経済」から「参加型経済」へ；「無限成長経済」から「地球環境経済」への五つで、学問の世界で捉えるのではなく、ホリスティックないのちの観点から見ると、ポストモダンのコミュニタリアニズムへの展開は分かるが、今日なお、西欧と日本を分かつのは、共同体から出立する個人から出立するかの問題であろう。日本型経営については、中根千枝『タテ社会の人間関係』における社会的成功の条件、村上・公文・佐藤『文明としてのイエ社会』における機能的階級制が日本の戦後の成長を可能にすると共に、1990 年代以降のグローバル化によりこのシステムの限界が露わになった。いずれにせよ、日本人は日本について無知過ぎはしないか。

3) 地球上の生物の王様は誰か？という問題が佐藤氏から提起された。植物か人間か。

経営のテーマは人間にだけ。宇宙原理から、人間原理へ。人間の総合的な経営が問題。

4. 本日の参加者からのコメント

西村：中国では CSR その他の問題が活発に、情報を提供された。これをめぐり、倫理と道徳を国際化と関連つけて捉える事などが話し合われた。個人レベルでは、きわめて多様。

田中：研究書としては限界があるが、問題提起の書物としては面白い。

緒賀：

長塚：電車の事故で遅れた。憲法 9 条をめぐって日本が人類に貢献している問題状況について発言があった。

新川、遠藤：両氏から近況報告があった。

以上

資料①②は添付

経済観測：東大法学部を創造的破壊せよ＝経営共創基盤 CEO・富山和彦（配布資料③）

毎日新聞 2013年06月21日 東京朝刊

かつて東京大の文科 1 類から法学部という進路は、文系学生のエリートコースの代名詞であった。ところが昨年、3 年次の専門課程に上がる進学振り分けで、何と法学部が定員割れを起こしたのである。ちょうど子供たちが受験世代なので実感として分かるのだが、入学試験においても東大文 1 にかつてのような輝きはない。

卒業生としては申し訳ないが、この傾向について私自身は喜ばしいことだと思っている。そもそも東大法学部出身者がトップエリートであったのは、先進国に追いつくために優等生型の官僚が大量に必要だったから。しかし我が国の発展段階はとっくにそんなステージを終えている。

加えて東大法学部を頂点とする日本の法学は、言語的障壁に守られ、国際競争にもさらされず、かなり閉鎖的な学問空間を形成している。その証拠に、今や社会科学の中心的研究分野の一つで、ノーベル賞学者も輩出している法と経済の学際分野では、我が国は極めておくれをとっている。秋入学や入試への英語能力試験「TOEFL」採用といった東大の国際化の努力に対しても、法学部は必ずしも積極的ではないといううわさを聞く。

はっきり言ってしまう。明治以来の伝統的な東大法学部の存在意義はなくなっている。法科大学院があるのだから、法学部、特に法律学科はもう廃止した方がいい。そうやって空いた定員分を使って、新時代の日本のリーダーとなるべき人材、正解のない問題を設定し、考え、そして世界のフィールドで議論できる人材を育成する21世紀型エリート養成学部を創設するのだ。

日本の教育の頂点に君臨していた東大法学部がそこまで徹底的な創造的破壊に取り組めば、我が国の人材育成は大きく変わるはずだ。